

令和4年度 神奈川県博物館協会（第1回研修会）参加所感

小田原城 岡 潔

令和4年5月11日（水）、神奈川県立歴史博物館講堂および特別展示室を会場に、令和4年度の第1回研修会が行われた。

内容は、同館で開催中の特別展「洞窟遺跡を掘る 一海蝕洞窟の考古学一」にかかわる講演および展示見学会であった。

ご承知のとおり、ここ数年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、不要不急とされる行動の制限や自粛が求められるなか、各館の方々は様々な対応におわれ、苦心されてきたことと思う。前々から企画し、準備を進めてきた事業や展覧会が実施できない、あるいは規模を縮小せざるを得ないなど、歯がゆい思いもされたことだろう。この県博協の研修会においても、感染拡大防止の観点から、昨年度は会場や時間を分け、分散して実施されるなど、部会長・幹事の方々のご苦労も並大抵でなかったろうと推察する。こうしたなか、今回は感染の拡大もおさまり、久々に「通常に近い」かたちでの実施が可能となった。28館58人もの参加を得て、無事開催されたことは、取りも直さずよろこばしい。

研修の概要

はじめに神奈川県立歴史博物館の望月一樹館長による開会の挨拶、つづいて特別展「洞窟遺跡を掘る 一海蝕洞窟の考古学一」見学会と題して、本展覧会の企画・実施を担当された、同館の主任学芸員千葉毅氏より、展覧会の趣旨や展示の構成、さらに開催にいたる経緯、反省点などについて講演いただいた。

今回は、県博協＝博物館関係者を対象とした講演であるため、一般参加者に向けて展示内容そのものを案内・解説するというよりも、担当者の思いや実施にいたる経緯など、外部からはうかがい知れない背景、いわゆる裏話が主題とあって、興味深く拝聴した。

当日は、研修会の直前に令和4年度の総会が行われた。予定より早く終了し、総会から引き続いての参加者が事前に展示を概観する時間があ

った。こともあり、質疑応答では、展示における「手書きコメント」や、オンライン動画配信のルール、アンケート等による反響の把握方法など、司会者もフォローにまわって具体的な点が話題となり、その後は各自特別展を自由見学し、解散終了となった。

考古学の魅力

さて、恐縮ながら筆者は考古学について専門外で、展示の学術的な内容について知見を述べる知識もなく、またその立場にない。以下は門外漢の一参加者としての所感を述べたい。

私見であるが、洞窟遺跡の存在をはじめ、そこで地道な発掘調査が行われ、多くの遺物が出土したこと、それらの長年の研究から、海辺に生きた当時の人々の暮らし、社会や文化の一端が少しずつ解明されつつあるなどといったことを、知る人はそう多くはあるまい。経験上、憧れの考古学者は「インディ・ジョーンズ」と笑顔で答える博物館実習生と出会うのも珍しいことではないのだ。

まず導入では、考古資料整理室（仮称 考古学研究室？）が設置され、様々な機材が並び、整理作業の様子をみせる（図1）。遺物がどのような場で、どんな方法で整理・研究が進められ、情報が引き出され、蓄積されていくのか。どんな人が介在して過去と現在、あるいは遺物と私たちをつな



図1 整理作業の様子

げてくれるのか、観覧者に身近な接点を意識させたうえで展示にいざなう仕掛けとなっている。「可能な限り、そこで実務の様子を見せたい」ともうかがったが、展示会の担当者が「自らを展示する」といった趣向も面白い。

今回の展示は、2001年に県指定文化財となった三浦市間口洞窟遺跡の出土遺物を、調査から50年の節目をとらえ、多くの未公開資料を含む全容を一室に公開し、調査の経緯や歴史、成果を紹介するものときく。展示室に入って概観すると、まず一面茶色や白のゾーンが目に入る。近づけば、土器片・土器片・土器、骨・角・骨、貝・貝…の大集合で、その膨大な数量に圧倒される。解説を読み、見学するうちに、素人目にも、なんとなく共通する属性がみえてきたり、それでいて個々に微妙な差異がある（ような気がしてくる）。系統だって展示され、集団で語りかけてくるパワーは絶大で、断片的な文献史料数点のみで、あれもこれも伝えようと四苦八苦する立場からはうらやましい。ただ、理解が浅い身からすると、しだいにお腹がいっぱいになり、申し訳ないが正直辟易してくる。ところが、そこに通常のキャプションとは異質の「手書きメモ」が現れると、にわかに入館の整理室に座っていた人の姿が目に見え（図2）。もう一度見返してみたくもなる。客観的な情報との区別を明確にしたうえで、担当者の目線や主観的な思いを伝えて共有することは、観覧

者の理解をたすけ、見学の意欲を高める。そういえば、展示室の入口で絶妙な角度でお出迎えしてくれたタヌキに出会ったが、要所に剥製資料や民俗資料、文献・絵画資料などが効果的に配置され、理解をたすけるとともに、素人にも飽きさせない工夫と配慮が感じられた。

というわけで、理解の程度はご容赦いただくとして、個人的には自分なりに楽しんで拝見することができ、勉強させていただいた。

ご苦労はあったと思うが、やりたいことを貫くのはいさぎよい。それでいて配慮もされている。多くの遺物が語る醍醐味と多分野にわたる資料を活かし、考古学の魅力を伝える展示であったと感じた。

オヤジの独り言

久しぶりに研修会に参加させていただいた。懐かしい方々とも再会でき、有意義な一日となった。本研修でご指導いただいた講師をはじめ、準備された部会幹事、県立歴史博物館の関係者の皆様にお礼申し上げたい。

ただ、少々不満もある。研修会が明るいうちに終わってしまうのは、オジサンとしては、やはり寂しい。コロナ禍以前は、最後に情報交換会が設けられ、その場ではざっくばらんに、異なる専門分野の方からも疑問や見解を聞くことができた。そうしたなかで、師であり同志となる人たちと出会い、交流できたことは、貴重な財産となっているし、館の垣根を越え、そうした信頼関係を育める土壤があるのも、この県博協の強みと思う。

早く「通常に近い」から「通常通り」の開催が可能となり、若い方々が積極的に参加されることを切に願う。



図2 担当者の思いが伝わる手書きメモ

令和4年度第2回研修会報告 「ロマンスカーミュージアムを見学して」

川崎市市民ミュージアム 鈴木 勇一郎

近年、京急電鉄が横浜に開館した京急ミュージアムなど、JR各社だけでなく、大手私鉄でも自らの鉄道に関するミュージアムを設置することが増えてきている。小田急電鉄も沿線の海老名にロマンスカーミュージアムを開館した。

今回、神奈川県博物館協会の研修会として、展示施設だけでなく、バックヤードも見学させていただく貴重な機会を得た。

海老名は、県央地域でも近年発展が目立つ都市だ。かつては相鉄線との乗換

駅としてくらいしか一般には認知されていなかったが、駅の周辺には商業施設が建ち並ぶようになり、街としての発展も著しい。小田急線のほぼ中間に位置するのに加えて車両基地がある。小田急がこうした施設を置くのに海老名を選んだのは、まさに地の利を得ている。

小田急は、鉄道業だけとってみても通勤通学から観光までさまざまな顔を持っているが、このミュージアムでは、ロマンスカーが小田急という電鉄のカラーを象徴すると位置づけ、歴代のロマンスカーの車両を展示の中心に据えている。

海老名検車区に隣接しているのも、実は今回見学するまでは、小田急線の線路とつながっていると思っていたのだが、実際にはつながっていないようだ。世界的に見れば、鉄道の博物館は営業線と線路でつながっている構造を取っていることが多い。イギリスのヨークの国立鉄道博物館やフランスのミュルーズ鉄道博物館、ドイツのニュルンベルグ交通博物館といった大型館だけでなく、中規模以下の博物館でもこうした構造を持つ施設が



図1 歴代ロマンスカーの展示

少なくない。展示車両の入れ替えが容易だからだ。

日本でも大宮の鉄道博物館、京都の京都鉄道博物館など、大規模館では導入されてきているが、中規模以下の館では寡聞にしてその例を聞かない。聞くところによれば、小田急電鉄では、他にも保存車両を保有されているようだ。こうした他の場所で保存されている車両との入れ替えをはじめ、今後の展示の可能性と柔軟性を増すという点でも小田急の線路とつながっていた方が良かったように感じる。線路とは繋がってなくても建物自体は、線路と隣り合っているのも、車両の入換は比較的容易にできるだろうが、線路がつながっていた方が鉄道を対象としたミュージアムとしての可能性はより広がったのではないだろうか。そうなったのはいろいろ事情があっただろうが、少し残念なところだ。

メインの展示物となる歴代ロマンスカーの車両は、1階のロマンスカーギャラリーで5車種10両を展示している（図1）。車両の検車庫をイメージした室内は、極めて簡素な内装だ。車両の説明版な

ども、必要最小限にとどめたという。実際に見てみると確かに簡潔な解説で、これを読んだだけで、この車両の詳しい内容や位置づけなどがわかるわけではない。自分自身もそうだが、説明が詳しいと、それを読んで満足してしまうので、詳しい解説をつければいいというわけではない。

とはいえ、展示場に車両がただ並んでいるだけでは、多くの人はいずれもそれだけで物語を引き出していくのが難しいことも確かだ。そうした中で、実際に運転士をされていた高橋孝夫館長が、ロマンスカーについて自らの体験を交えた解説をすることで体験を共有する試みを展開していることは重要である。今回も少しお話をうかがうことができたが、その中で印象に残ったのが「匂い」という経験である。確かに入ってみると、嗅いだことのある独特の匂いがほのかに漂う。実物の車両でしか体験することはできないだろう。

ところで、かつて小田急沿線の厚木市に住んでいた私にとって、展示されている車両の多くは、実際に乗ったことのあるタイプだ。だからロマンスカーミュージアムを訪れると、「沿線民」としての体験を共有することは比較的容易だ。特に実物の車両は、こうした体験の記憶を甦らせてくれるという点で、代替が利くものではない。

また流線形の車体に、先頭展望席、2階にある運転席といった特徴のある形状、連接台車をはじめとする野心的な技術など、小田急に勤務する従業員にとっても、こうした特色ある歴代の車両は、帰属意識を高める効果があるだろう。

このように、体験を共有するという点で、展示室に並べられた本物の車両ほど、鉄道という存在を雄弁に語るものはない。ただ同時に言えるのは、鉄道は車両だけで動くものではない、ということだ。保線や営業、さまざまな要素から複雑にシステムが構成されているのが鉄道である。沿線との関係を考えるにせよ、車両だけではその物語を紡ぎ出すことは困難だ。地域社会との交流基盤の創出ということもこのミュージアムの目的のひとつとなっているが、地域社会との関係は歴史の中で作り出されてきたものであり、とりわけ地域との関係を考えていくためには、車両以外の資料も重要である。

それを物語るには、さまざまな文書資料の収集や保存が重要となってくる。残念ながら現在のロマンスカーミュージアムには、こうしたことには

あまり取り組みが進んでいないように見受けられた。設備や体制がまだ整備されていないようなので、今後はこれらを整えていくことが重要だろう。特に収蔵品を保管しておく収蔵庫は、暫定的なものでも構わないので、早急に整備しておくべきである。

限られたスペースと資源の中で、全てを網羅的に扱うのは無理がある。ロマンスカーという切り口から、小田急という鉄道を紹介するというコンセプト自体は非常に良いのではないと思う。ただロマンスカーひとつとっても、語るべきコンテンツは車両だけではないだろう。小田急の年表などを展示しているロマンスカーアカデミアで多少の言及はあるが、長らくロマンスカーならではのサービスとして親しまれた「走る喫茶室」などは、もう少し詳しく紹介したほうが、よりロマンスカーや小田急の特徴を出せたのではないと思う。

2階にあるジオラマパークは190㎡の面積があり、国内でも有数の規模を持っている。小田急の沿線の様子が、デフォルメされながら詰め込まれている。特に高低差の大きい箱根の景観も再現されているのは、まさに小田急ならではのところだろう。ここでは小田急のさまざまな車両、合計15車種の模型が運転されている。こうした鉄道ジオラマの裏側を見たのは、私自身は初めての経験だったが、ジオラマに常時模型を走らせておくのは、想像するよりもずっと過酷なことで、運行を維持するためには、こまめなメンテナンスを計画的に運用して行くことが必要だということだ。運転を本格的にしていけばいくほど、現実の鉄道の運営に近づいていくというお話はとりわけ興味深かった（図2、3）。



図2 ジオラマパークのバックヤード

さて、ロマンスカーミュージアムには、館内からだけでなく一般の利用者も使えるカフェやロマンスカーをテーマにしたこども向けのあそび場「キッズロマンスカーパーク」もあり、「間口を広げる」という点では、今のところ非常に成功しているのではないかと思います。間口を広げておくことも重要だが、同時にどこかで深掘りを追求する場面も出てきてもいいのではないかと思います。ロマンスカーミュージアムが、今後どのような方向で発展していくのか期待するとともに、貴重な機会を提供して下さった方々にあらためて感謝の意を表したい。



図3 ジオラマパーク運営の解説

「博物館調査研究報告の現在とこれから —自然史系調査研究の報告事例から—」参加記

よこはま動物園ズーラシア 櫻堂 由希子

2022(令和4)年12月7日(水)、神奈川県生命の星・地球博物館講義室において「博物館調査研究報告の現在とこれから—自然史系調査研究の報告事例から—」が開催された。これは令和4年度神奈川県博物館協会第3回研修会として開催され、参加者のほとんどは加盟館園職員などの協会関係者であった。

研修会のテーマについて

今回の研修会は博物館や学芸員が関わるかたちでの地域の自然史系調査研究報告がどのようになされているのか、近年社会的に広く意識されるようになってきたシチズンサイエンスやオープンサイエンスの考え方を踏まえて、加盟館園の周辺で行われた最近の実例を紹介するとともに、発表者らによるパネルディスカッションを通じて、参加者が今後可能な役割分担を学び、博物館活動や地域の自然環境保全にどう活かすのかを考える貴重な機会となった。以下では今回の発表者5名の報告内容を簡単に紹介し、併せて私自身が研修会への参加を通じて感じたことを報告させていただく。

各館園からの事例報告に先だって神奈川県立生命の星・地球博物館の学芸員・大西亘氏より今回の研修会の趣旨説明と導入が行われた。同氏によると近年研究報告に関しては従来の研究会報誌の刊行のみならず「デジタル化」という新たな展開を迎えつつあり、調査研究成果の投稿に関して多種多様なものが見られるようになったとお話いただいた。また博物館においても市民参加型科学(シチズンサイエンスプロジェクト)のプログラムが多く行われ、市民と科学者が協力して実現を目指す科学の実施形態である「シチズンサイエンス」の大切さや様々な調査において市民からの情報提供を反映するインターネットポータルサイトの数々をご紹介いただいた。

自然史系調査研究においては研究対象が「自然史」という特性から多大な時間と労力をかけてはじめて結果が見えてくるものであることから、多

くの市民の目を通して得られた情報も重要な要素となり、その積み重ねが結果に大きく貢献している。さらに市民自身を調査に参加させることにより自然環境保全への関心のきっかけを提供し、最終的に自ら科学的な活動に関わる可能性を高めることにもなるため、今後の普及啓発においても重要な役割を果たしていると感じた。

事例報告1

「水族館を活用した研究、飼育員が携わる意義」

(新江ノ島水族館 北嶋 円)

新江ノ島水族館では開園当初より観光施設としての役割に加え博物館相当施設として調査研究を事業の柱の一つとしており、長年神奈川県自然誌資料に報告などを行っている。今回は発表者である北嶋氏が自ら主体となって行った「江の島および川流域におけるヌマガエル(カエルの一種)の初記録と塩分耐性」について研究経緯と論文投稿にいたるまでの試行錯誤をご紹介いただいた。論文投稿について多くの飼育員が苦手意識を持つなか、様々な助力を得て論文投稿まで至った北嶋氏の熱意と「記録として残す」ことの重要性をとっても大きく感じられた。

事例報告2

「金沢自然公園等における自然史系調査報告事例の紹介」

(金沢動物園 先崎 優)

金沢動物園では大型草食動物を中心に飼育展示を行っているが、近年は身近な動植物についても普及啓発を行っている。動物園敷地内に自然が多く、公園管理に伴う植生や生物相に関する記録が多数残されているがこれらは外部に発表されておらず、また動物園の共同研究においては自然史系の調査は一般的とは言い難かった。今回の報告では先崎氏が行ったハナダカダンゴムシとアギトアリの共同研究の内容を通して個人や職場内の活動で域内に関する取り組みが開始されつつあることを紹介いただいた。また「共同研究」というとその題材選びが難しく感じられるが、普段接してい

る身近な自然においても視点を変えれば共同研究たる様々な題材が眠っている可能性があると感じられた。

事例報告3

「市民とともに星空に触れ、宇宙を調べる ～ひらつか星空調査隊を例に」

(平塚市博物館 塚田 健)

平塚博物館では身近な自然について調査する「みんなで調べよう」という行事を不定期開催してきた。今回の報告では平塚市域の星の見え具合を調査した「ひらつか星空調査隊」についての5年間の活動成果と見えてきた課題についてご紹介いただいた。この行事により市民から参加者を募り、星空を観察する楽しさを体験してもらうとともに「光害（ひかりがい）」という公害についての普及を行うことができたが、科学的に意味のあるデータの入手方法やデータの個人差の大きさ、年を追うごとの調査員のモチベーション維持の困難などが課題に挙げられた。この課題はすべてのシチズンサイエンスを行うにあたって起こることであり、どのようにしてこれらの課題を解消すべきか議論することが今後必要になっていくと感じられた。

事例報告4

「電子出版物を活用した調査研究成果の公開、利点と留意点」

(県立生命の星・地球博物館 渡辺 恭平)

近年、紙に印刷をせずに、インターネット上で出版する「電子出版物」が増えており、学術活動等の成果を公表する選択肢として今後重要度が高まることが期待でき、その利点と留意点をご紹介いただいた。電子出版物の利点としては「出版コストが低い」「ページ制限がない」「公開しやすい」などが挙げられ、欠点としては「編集ソフトが必要」「公開するウェブサイト等が必要」、留意点としては「編集者にそれなりの編集知識と学術分野の専門性を有している必要がある」ことが挙げられた。一見すると電子出版物の方が良い点が多いと感じたが、出版物の体をなさないものや、粗雑な報告が掲載される事例が散見されるケースもあると紹介され、留意点の重要性が感じられた。また発表途中に電子出版物のデータを入稿し、製本された冊子が回覧されてきたが、紙媒体の報告書

となんら遜色のないものと感じ、編集の知識があれば電子媒体と紙媒体両方を維持していくこともできると感じられた。

事例報告5

「地域の博物館の役割と、子どもたちの発表・練習の場としての報告媒体」

(観音崎自然博物館 佐野 真吾)

観音崎自然博物館ではこれまであった「博物館ニュースたたらはま」を「博物館研究報告たたらはま」と改め、研究報告としてリニューアルしたことや2021年から小・中学生の子どもたちを対象に「ジュニア研究報告」の発行も開始したことをご紹介いただいた。特にジュニア研究報告書においては同館による「ジュニア生物調査隊」を発足したことにより、発見者が自ら発表し書ける人材を育成することを目的としており、その場の成果だけではなく、参加者の未来に繋がるシチズンサイエンスの橋渡しとしてすべての学芸員が考えていかなくていけないことと感じられた。

パネルディスカッション・総合討論

総合討論においてはよこはま動物園ズーラシアの有馬氏が司会をつとめ、事例報告を行った5名の発表者への質疑応答の形で総合討論を行った。総合討論の内容としては、研究や論文投稿を始めるにあたり学芸員と連絡をつけるにはどうすればよいのか、自然史系調査に興味をもった子供たちにどのように科学的リテラシーの取得など「次」の段階につなげていけばよいのか、また論文作成の際はその論文が筋立っているものかどうかをまず学芸員に相談してほしいなど学芸員としての在り方や論文投稿の敷居を低くするにはどうしたらよいかなどの話が多く行われた。

全体を通して

最後にこの研修を通して、研究報告書として後世に残していくことの大切さや自身が論文投稿をすることで研究テーマを持ちつつも投稿を躊躇する人の背中を押すことの大切さを改めて感じた。それと共に、どの館園も研究活動自体が情報の収集や発信にも役立っていると理解しつつも職員の熱意に頼っている部分が多く、館園の運営業務との両立には運営側の研究活動の意義についてのさらなる理解が必要とも感じる研修会であった。